

ドレスデン宮廷劇場広場の形成過程

ーゴットフリート・ゼムパーの役割ー

SHU BOYA

一、序章

ドイツ連邦共和国ザクセン州のドレスデンにあるドレスデン宮廷劇場広場（以下、劇場広場）は、18世紀から20世紀にかけて、多数の建築家たちによって種々の計画が試みられてきた場所である¹。前稿では、マーカス・コンラート・ディーツェ (Marcus Conrad Dietze 1658-1704) からフランソワ・デ・カビリーズ・エルダー (François de Cuvillies der Ältere 1695-1768) にいたるツヴィンガー宮殿計画の一連の流れを概観し、ゴットフリート・ゼムパー (Gottfried Semper 1803-1879) によって劇場広場が創出される前の敷地を、建築家たちがどのように読み解き、都市のなかに位置づけてきたのかを確認した²。これをふまえたうえで本稿では、ゼムパーのツヴィンガーフォーラム計画と劇場計画を取り上げ、本敷地がゼムパーによって劇場広場としてどのように形成され、変容されていくのかについて考察し、都市の重要な構成要素たる広場の空間生成にゼムパーが如何なる役割を果たしたのかについて検討したい³。

二、ゼムパーにおける計画の変遷過程

ゼムパーによる劇場広場の計画案は、ツヴィンガー宮殿建設等によってドレスデンの都市発展に寄与したザクセン王国の初代国王フリードリヒ・アウグスト一世 (Friedrich August I. 1750-1827) の記念像配置計画が委託された1835年にはじまる⁴。当時、ツヴィンガー宮殿とエルベ川に挟まれた敷地 (図1) は、宮廷教会の建設に参加した職人の職場および住居として、さまざまな平屋建ての木造建築物で構成されており、イタリアの村落 (Italienische Dörfchen) と呼ばれていた⁵。またツヴィンガー宮殿は、未完成の状態として、北東側が壁によって閉鎖されていた。ゼムパーはこうした敷地状況を鑑みつつ、イタリアの村落と呼ばれるバラックを一掃して、オランジェリーや劇場などから構成されたツヴィンガーフォーラム (Zwingerforum) を計画することとなる⁶。そしてフォーラム計画の一部として、1835年から1839年にかけてツヴィンガー宮殿の北東側に代表的なオ

ペラ劇場である第一ドレスデン宮廷劇場 (Altes Hoftheater 工期1838-1841) と、1838年から1847年にかけて絵画館 (Gemälde-galerie 工期1847-1855) を設計した⁷。また第一劇場が1869年9月21に火災に見舞われ焼失したのをきっかけに、1870年から1878年にかけて長男マンフレッド・ゼムパー (Manfred Semper) とともに第二劇場 (Neues Hoftheater 工期1871-1878) を設計している⁸。ゼムパーの計画とゼムパー以後の計画概要を (表1) にまとめ、それぞれの詳細を以下に記す⁹。

(一) ツヴィンガーフォーラム計画

まず1835年に提示された案 (図2) をみると、これは半閉鎖型のツヴィンガー宮殿 (Zwinger) をエルベ川に開いて、広大な広場が計画されたものとみることができる。広場の南東側は、既存の宮廷教会

(Katholische Hofkirche)、王宮、衛兵本部 (Schinkelwache) とツヴィンガー宮殿で囲まれている¹⁰。広場の北西側はツヴィンガー宮殿とゼムパーが設計したオランジェリー (Orangerie) と第一劇場に囲まれている¹¹。広場の北東側はエルベ川に開放され、岸壁には栈橋と階段がある。記念像の設置場所は、南西から北東に向かって、ツヴィンガー宮殿内の北西側、オランジェリーと衛兵本部の間の計3ヶ所が示されている。さらに、ゼムパーによって同年に提出された案 (図3) は、新たな劇場の建設中にも旧劇場 (Kleines Hoftheater) を使い続けることができるように、先の計画より劇場をエルベ川から遠く離すことが提案された¹²。その後1837年に、ゼムパーは本計画案に基づいて劇場の細部を完成させるよう依頼されることとなる¹³。第一劇場は1838年春に実施案が纏められて着工し、1839年に屋根葺き式が行われ、1841年4月12日にゲーテのTorquato Tassoで柿落としされた。

1839年に提示された案 (図4) は、ツヴィンガー宮殿の北側に広場を作るという計画であり、ツヴィンガー宮殿の北西側を馬蹄形に囲むような形で、新たなフォーラムの要素としての絵画館が計画された¹⁴。この案は、ツヴィンガー宮殿とエルベ川との間の計画に影響しないよう、宮殿の北側に絵画館と広場を計画するものであり、先案を補完するものとみることができる¹⁵。広場の南東側は、1階建ての柱廊であるオランジェリーと第一劇場、南西側は絵画館とツヴィンガー宮殿からなる2階建ての建物群、北東側は既存の砂糖工場 (Calberlasche Zuckersiederei) で囲まれている¹⁶。この計画では、ツヴィンガー宮殿が絵画館の前庭として機能することを想定しており、その部屋の一部は絵画館に組み込まれている¹⁷。絵画

館は、ツヴィンガー宮殿のウォールパビリオン

(Wallpavillon) から階段でアクセスすることができる¹⁸。遠隔地であることと、ウォールパビリオンの上にドームを作ることが許可されなかったため、この案は実現していない¹⁹。

1839/40年に提示された案(図5)は、ツヴィンガー宮殿をエルベ川に向けて拡張した計画である。ツヴィンガー宮殿の南西側にあるクロネントール

(Kronentor) を絵画館に改築し、クロネントールを反対側の北東側に移動して、手すりのような境界線で隣接する建物に接続することを目論んでいる²⁰。広場の北東側はエルベ川に面しており、劇場の前には階段と記念像が設置されている。この案では、記念像の設置場所がまだ最終的に決定されていなかったため、南西から北東に向かって、ツヴィンガー宮殿の中央、第一劇場の南東、フォーラム入口の階段の間、エルベ川のほとりの計4ヶ所が候補としてあげられている。この案は、1840年の夏にオランジェリーの建設に着手することが決まった。しかし、必要な建築スペースが確保できなかったため、1840年末に延期された²¹。その後1841年に宮廷建築家オットー・フォン・ヴォルフラムスドルフ (Otto von Wolframsdorf 1823-1849) がオストラ・アレー

(Ostra-Allee) 通りの公爵領庭園 (Herzoglichen Garten) にオランジェリーを建設したことによって、この案の実現可能性はなくなった²²。

1840年に提示された案(図6)は、絵画館を利用してツヴィンガー宮殿の北東側を閉鎖し、ツヴィンガー宮殿の中庭空間と広場空間を作り出す計画である²³。広場の南東側は宮廷教会、衛兵本部と王宮で囲まれ、南西側は絵画館で囲まれ、北西側は半開放で第一劇場で囲まれている。広場の北東側はエルベ川に開放され、劇場の前には手すりや記念柱が設置されている。この提案は、ツヴィンガー宮殿の構造変更や更なる解体工事を必要とせず、経済的に有利であるため、その後も引き続き検討された²⁴。

1842年に提示された案(図7)は、ツヴィンガー宮殿をエルベ川に向けて拡張したものであり、シンケル設計の衛兵本部をエルベ川岸に移転する計画である²⁵。広場の北東側には、すでに建設されたオランジェリーに代わって、第一劇場の書割等を収める収蔵庫 (Kulissenmagazin) が提案された²⁶。広場に面した収蔵庫の正面に劇場とツヴィンガー宮殿をつなぐ廊下が設けられている。広場の北東側は衛兵本部で囲まれ、劇場前には手すりや三本の記念柱がある。記念像はツヴィンガー宮殿内の北西側に設置されている。この案は、絵画館が城に近すぎることによる

火災時の危険性と、衛兵本部の移転やイタリア村落の一部取り壊しなどにかかるコストの問題から、却下された²⁷。さらに、ゼムパーによって同時に出された案(図7)は、ツヴィンガー宮殿の北側に広場を作るという計画である。この案は衛兵本部の移転ができない場合に適用される予定のもので、広場の南西側には、ツヴィンガー宮殿に続く階段と、巨大なドームを持つ長方形の絵画館が設計された。広場の南東側はゼムパーが設計した収蔵庫と第一劇場で囲まれている。広場の北西側には昔の堀を利用した広大な水盤があり、北東側には既存の砂糖工場がある。この案は、劇場とツヴィンガー宮殿の高さの違いにより、建物の基礎工事や巨大なテラスの建設に莫大な費用がかかるとして、実現されなかった²⁸。

1842/45年に提示された案(図8)は、ツヴィンガー宮殿をエルベ川に向けて拡張した計画である。この案は、1842年提案の収蔵庫が最終的に否決された後に練り直されたもので、広場の北西側にあった収蔵庫を衛兵本部に置き換えるという計画である。広場の南東側は、ツヴィンガー宮殿、宮廷教会とゼムパーが設計した絵画館とで囲まれている。絵画館の中央には、ロトンダの代わりにシンプルな長方形のホールがあり、北東側の入り口前に階段が設けられている。広場の北東側はエルベ川に開放されており、劇場の前には手すりや記念柱が設置されている。絵画館の火災や公害の危険を避けるため、この案は実現していない²⁹。

1846年に提示された最終計画案(図9)では、1840年の案に基づきつつ、ツヴィンガー宮殿の北東側を閉鎖し、宮殿の中庭空間と広場空間とを作り出す計画である。この案は、絵画館とツヴィンガー宮殿が一体となり、中庭がパブリックコレクション専用の建築群の壮大な庭と見なされている³⁰。ツヴィンガー宮殿の中庭と広場は、絵画館中央のオープンドームのホールと通路でつながっている。2つ目のモニュメントは、ツヴィンガー宮殿の中庭にアウグスト一世の記念像と対面して配置されている。1846年にこの案を実行することになり、絵画館はツヴィンガー宮殿の北東側を塞ぐことが決まった、その後ゼムパーは絵画館の細部を3案作成している。絵画館の礎石は1847年7月23日に据えられ、1855年9月25日に開館した。

1846年の計画案が、ツヴィンガーフォーラム計画案の最終のものと思われる。ツヴィンガー宮殿からエルベ川までの一帯(図10)は、1864年時点において、南東側には宮廷教会、王宮、衛兵本部、南西側にはツヴィンガー宮殿と絵画館、北西側には劇場、

北東側には砂糖工場と職人小屋があり、これらが一体となって不規則な空間を形成している³¹。

(二) 第二劇場

1869年9月21日にドレスデンの第一劇場が焼失した後、広場空間の見直しが可能になった。ゼムパーは、市民の請願に基づき、1870年2月末にドレスデンを訪れ、第二宮廷劇場の計画と建設を引き受けた³²。これに伴い広場空間も見直されることとなる。1870年に提示された案(図11)は、第二劇場を第一劇場の位置から北西側に後退させている³³。こうしてお互いに独立する第二劇場、絵画館と宮廷教会によって新たな劇場広場が構成された。広場空間に対する顔となる第一劇場の円筒形正面空間(図12)よりも、第二劇場の弓型湾曲面の方(図13)が、ファサード性が強くなっており、広場空間の顔であることを強調している。第一劇場のメインファサードは約64メートル、改築された第二劇場は長さ約83メートルのファサードに統合されている。第二劇場は、1871年4月に定礎され、1878年2月2日にゲートの *Iphigenie auf Tauris* で柿落としされた。

(三) ゼムパー以降

ゼムパーが計画した後の劇場広場は、何十年もの時を経て、ドレスデンの主要な道路が交差する交通量の多い場所となっていた。交通問題の深刻化により、1904年、ドレスデンの旧市街と新市街を結ぶアウグストゥス橋が再建されることになった。さらに、新たな橋の下と川岸に路線を追加し、川岸の細長い建物は取り壊された。このため、ザクセン州の行政当局は、絵画館とエルベ河畔の間にある劇場広場の設計変更(図14)を検討することになった³⁴。この問題を解決し適切な案を見つけるために、6年間何度か公募が行われた。最初の提案は、増大する交通の障害となっていた衛兵本部をエルベ川のほとりに移転しようとするものであり、これは1842年のゼムパーの案に類するものである。また、エルベ川に向かって広場を開放する案や、古いイタリアの村落にあるような低い建物を建てる案もあった。

ドレスデンの都市建築委員であった建築家ハンス・エルヴァイン(Hans Erlwein 1872-1914)によって1910年に提示された案(図15)は、小さなレストランで劇場広場を閉ざし、木々に覆われたガーデンテラスを、アウグストゥス橋に一部開放するように設計されている³⁵。この計画では、新市街からエルベ橋を渡り広場に至る景観をより重視している³⁶。このレストランは、1911年の秋に工事が始まり、1913

年に開業した。

三、計画案における軸線と空間構成要素の分析

前稿では、ディーツェからエルダーにいたる一連のツヴィンガー宮殿計画について、軸線と空間構成要素という観点から分析を行い、その結果、南西から北東方向の軸と南東から北西方向の軸という2軸が建築家たちによって案出され、2軸の兼ね合いが多方面から検討されてきたことを指摘した。これをふまえたうえで本章では引き続き、ゼムパーの計画案における軸線と建物の配置、さらには建物を取りまく広場との関係に焦点をあてて分析することによって(図16-18)、劇場広場がどのように生成されてきたのかを明らかにする。

まず1835年の計画案(図16.1)は、主軸を南西から北東方向とし、3つの二次軸を南東から北西方向に設定している。南西から北東に向かって、広場を分割する最初の二次軸はツヴィンガー宮殿の前庭中心を通り、広場の主軸の起点・終点となっている。次の二次軸は、対面するオランジェリーと衛兵本部とを繋ぐ位置にあり、最後の二次軸は、第一劇場と宮廷教会とを繋ぐ位置にある。広場の南東側にある衛兵本部と宮廷教会は、いずれも広場の主軸から外れており、厳密には左右対称に配置されていない。しかし、広場空間には非常に明確な方向性が示されており、バランスは得られていると思われる。主軸に沿って伸びる3階建ての第一劇場のメインファサードと、その背景となる1階の細長いオランジェリーとの高さやスケールの違いは明らかで、長い主軸の奥行きを強調しており、劇場をより際立たせる役割も果たしている。これにより、劇場は複合施設の中で圧倒的な存在感を示すことになるかと推察される。

これと同時に示された次案(図16.2)では、主軸を南西から北東方向とし、複数の二次軸を南東から北西方向に設定している。この案は、前案の構成に基づきつつ、オランジェリーを短縮し、劇場を南西方向に移動させたものである。このことより第一劇場は、宮廷教会と相互の関わりが薄いものとなった³⁷。しかし、宮廷教会と王宮が形成する南東側の細い道を通り、広場に向かって第一劇場のメインファサードを見ると、劇的な視覚効果がもたらされると推察される。この計画は二次軸に対して完全な左右対称をとるのではなく、オランジェリーの入り口や植栽の構成に非対称の場所がみられる。また広場の北東側をメインエントランスとし、主軸に面することで、広場のモニュメント性を高めていると考えられる。

1839年に出された次案(図16.3)は、先の計画を

補完するものとして、主軸を南西から北東方向の 2 つの平行軸とし、二次軸を南東から北西方向に複数設定している。この案は、主軸と二次軸によって形成される格子状の空間構造で構成されている。南西から北東方向の両主軸がエルベ川に面し、南東から北西方向の二次軸を中心に、絵画館とツヴィンガー宮殿からなる大規模な建築群が構成されている。1839 年の第一劇場の屋根葺き式に伴い、この広場計画においてオランジェリーは、ツヴィンガー宮殿と劇場だけでなく、2 つの広場をつなぐ中心地として、さらに重要な役割を果たすようになった。

1839/40 年に出された次案（図 16.4）では、主軸を南西から北東方向とし、3 つの二次軸を南東から北西方向に設定している。広場の南西側にある絵画館のドームは、広場の視覚的な中心であり、広場の中央に位置するクロネントールと空間的な対応を形成している。この 2 つの間に明確な空間軸が生まれ、広場の主軸となり、さらに北東入口の階段とエルベ川のほとりにある記念像によって、空間の軸性が強化されている。1835 年の第二案と比較すると、この案はオランジェリーと衛兵本部の間において、より明快な左右相称をなしている。この空間の二次軸は、衛兵本部の中心とは一致せず、その南西に位置している。また、第一劇場前の二次軸は、宮廷教会の南西に位置しているため、空間全体のバランスと変化に富んだものとなっていると推察される。

1840 年に出された次案（図 16.5）では、前案における軸の位置が概ね維持されているものの、絵画館が計画されたことにより空間が 2 つに分断され、エルベ川に面した広場のスペースが他の案よりも縮小されている。この広場は、形も大きさも異なる第一劇場、衛兵本部、宮廷教会によって取り囲まれ、また北西と北東の両方向に開かれており、ほとんど規則性をもたない空間形態となっていると考えられる。

1842 年に出された次案（図 17.1）では、主軸を南西から北東方向とし、3 つの二次軸を南東から北西方向に設定している。この案は、これまでのゼムパーの提案に比べ、より規則性とバランスを重視したものとなっている。3 つの二次軸に支配された空間は、完全かつ均衡を保ちながら主軸で結ばれ、一連の空間を形成している。対面する収蔵庫と絵画館は、長い広場の奥行きを補強し、収蔵庫の前にある連続した柱廊は劇場を強調している。第一劇場は、主軸に向かって押し出されて複合施設の最初の境界を形成している。ツヴィンガー宮殿からエルベ川に向かって、第一劇場の形と位置によって、視界は宮廷教

会のほうに押しやられる³⁸。この案は、広場の北東側を衛兵本部によって取り囲むもので、広場をエルベ川に向かって完全に開放していない最初のものである。

同時に出された次案（図 17.2）では、主軸を南東から北西方向の 2 つの平行軸とし、二次軸を南西から北東方向に設定している。この案は、主軸と二次軸によって形成される格子状の空間構造で構成されている。この計画は、軸線と斜めの線を使って形作られた半開放の広場空間で、既存の建物や道路は広場の北東側に位置し、広場全体は台形の形をなしている。絵画館は台座の上に立ち、中央の高いドームが広場の主な景観を形成し、広場を統一しているため、どこに立っても一つの焦点となる視線がある。

1842/45 年に出された次案（図 17.3）では、主軸を南西から北東方向とし、3 つの二次軸を南東から北西方向に設定している。この案は、1842 年の最初案をほぼ踏襲したもので、衛兵本部をもともと収蔵庫があった場所に移し、広場の北西側を半自然の環境に開き、北東側をエルベ川に開いている。また 1835 年から 1840 年の案におけるオランジェリー、1841 年の案における収蔵庫、1842/45 年の案における衛兵本部から、ゼムパーは広場の北西側を閉鎖することを望んでいたことは明らかである³⁹。

1846 年に出された次案（図 17.4）では、1840 年の計画案における軸の位置を概ね維持しつつ、主軸を南西から北東方向とし、2 つの二次軸を南東から北西方向に設定している。この案では、劇場正面の手すりやモニュメント柱などの要素を排除し、主軸を強調していたメインエントランスも消滅させた。劇場前の空間を単独で見ると、不規則な建物の形をしているため、空間には明確な軸がなく、絶対的な方向性がないと思われる。この案に基づき、翌年には絵画館の建設が開始された。絵画館の完成により、ツヴィンガー宮殿内の空間は中庭となり、絵画館とエルベ川の間はさらに重要な意味を持つようになる。そのため、広場の計画では、空間の中心に主軸と二次軸を作る、可能な限り規則性を持たせることが重視されるようになったと思われる。

第一劇場の焼失を受けて 1870 年に出された第二劇場の案（図 17.5）では、主軸を南西から北東方向とし、二次軸を南東から北西方向に設定している。第二劇場は、主軸から後退し、空間を開放している。劇場のメインファサードは広場を構成する重要な要素の一つであり、半円形の輪郭を持つ第一劇場よりも、第二劇場の緩やかな曲線の方が、広場を囲い込む大きな役割を果たしている。第一劇場は 1835 年の

案で建設され、最終的に建設されなかったオランジェリーやツヴィンガー宮殿の北東側を塞ぐ絵画館は想定されていなかった⁴⁰。その結果、第一劇場は橋の上から見ると絵画館を遮り、不規則な空間を形成した。第二劇場の設計と位置によって、空間を見直し、広場を創出させたと考えられる。

ゼムパー以降、ハンス・エルヴァインによって1910年に提示された案(図18)は、ゼムパーによって企図された軸の位置を維持しつつ、広場中央にあるザクセン王国の第4代国王ヨハン(Johann 1801-1873)の記念像と、建物の正面玄関と、主軸を強調している⁴¹。

以上にみてきたとおり、1835年の計画案は北東のエルベ川方向に拡張する主軸を一つとし、二次軸を三つ設定していた。1839年の計画案は前案の軸線をふまえつつ主軸に平行な軸線をもう一つ設定し、二つの軸をエルベ川の方に拡張するものであった。1839/40年の計画案、1840年の計画案、1842年の第一計画案は、いずれも主軸が北東方向への拡張を企図するものでありながら、個別にみるとエルベ川への開き方に、開放、半閉鎖、半開放とそれぞれ差異がみられるものであった。1842年の第二計画案は、ツヴィンガー宮殿の北西方向に拡張する軸線を使用して、それと平行な軸を設定した唯一の特異なものであった。1842/45年、1846年、1870年の計画案は、すでに多岐にわたり検討されてきたように、北東のエルベ川方向に拡張を目論むものであり、1870年の計画では劇場の再建により、衛兵本部に対応する二次軸のスペースが1840年の計画よりさらに縮小しているものであった。そしてハンス・エルヴァインの計画案は、ゼムパーの案を継承しつつ、ツヴィンガー宮殿からエルベ川に向かう軸の重要性を意識したものともみることができる。

四、結章

小論で取り上げてきた劇場広場は、16世紀に要塞の城壁拡張に伴い創出された新たなスペースに、ディーツェ、ペッペルマン、キアヴェリ、シンケル、ゼムパーという様々な建築家や芸術家たちが重層的に設計を行った結果として生成されてきたものである⁴²。軸という観点から改めて彼らの計画案を通覧してみよう。ディーツェの計画案では南北と東西に交差する2つの軸が主張されていた。ペッペルマンの計画案では、ディーツェによる交差軸が継承されつつも、当時計画の中心にあったオランジェリーの南東方向に拡張する軸線と、北東のエルベ川方向に拡張する軸線とが創出された。ロングルー、キアヴ

ェリ、カビリーズの計画案は、ペッペルマンの案を引き受けつつ、特にツヴィンガー宮殿からエルベ川に向かう軸を強調するものであった。そしてゼムパーの計画案は、ペッペルマン以降継続的に検討されてきたエルベ川方向への軸のあり方をさらに模索するものであった。なかでも1839年の計画では、2つの主軸がエルベ川に向けて設定され、これはゼムパー以前にはない初めての試みであったといえるだろう。またゼムパーの計画における二次軸はすべて敷地南東側にあるツヴィンガー宮殿、宮廷教会、衛兵本部という3つの既存建物を意識したものであったと考えられる。ペッペルマンとゼムパーの計画の一部では、軸を南西から北東方向とし、二次軸を南東から北西方向に設定しているが、両者の軸は異なる意味合いを持っている⁴³。

ゼムパー以前の計画案では、王権を示すために規則的で対称的な空間形態が求められており、そのなかでエルベ川に向かう軸線が案出された。その軸線によって計画された庭園は、王宮の前庭に属するものとして、その境界は閉じられ、全く公共性をもつものではなかった。一方でゼムパーの計画案は、既存の建物群やエルベ川に向かう軸線を引き受けつつも、そこに19世紀の都市空間に求められていた広場の新たなあり方を重ね合わせ、とりわけ都市への開き方を模索するものであったといえる。この意味においてゼムパーは、都市開発が展開するなかで、過去の建築作品や建築家の意図などの存在意義を継続させつつ、都市空間を新しく再生していく可能性があることを示したと考えられる⁴⁴。

注釈

¹ 本研究の対象であるドレスデン宮廷劇場広場は、ツヴィンガー宮殿とエルベ川、そしてドレスデン宮廷劇場に三方を囲まれた敷地である。

² 拙稿「ドレスデン宮廷劇場広場の形成過程ーディーツェからカビリーズまでー」、京都芸術大学大学院紀要2号、141-153頁。

³ ドレスデン宮廷劇場広場に関する主な研究として、劇場広場にある建築の計画概要を整理したものや、ツヴィンガーフォーラムの計画概要を整理したもの、ゼムパーの都市計画に関するもの、ゼムパー後の劇場広場の再設計に関するものなどがあげられる。劇場広場にある建築は、主に劇場、絵画館や衛兵本部などで構成されている。この中で第一劇場と第二劇場の計画概要に関しては、前稿「ドレスデン宮廷劇場広場の形成過程ーディーツェからカビリーズまでー」と同じ参考文献を参照した。ゼムパーが設計した絵画館の計画概要を整理したものに関しては、次の文献を参照。

Heinrich Magirius, Harald Marx, *Gemäldegalerie Dresden. Die Sammlung Alte Meister. Der Bau Gottfried Sempers*, Leipzig, Seemann E.A, 1992.

Heidrun Laudel, "Dresden 1834-1849", Winfried Nerdinger, Werner Oechslin, ed., *Gottfried Semper, 1803-1879: Architektur und Wissenschaft*, München, Prestel Verlag GmbH + Co, 2003, pp. 186-195.

Larissa Ferro M.A, "Gemäldegalerie Dresden Eine Betrachtung des Außenprogramms der Dresdner Gemäldegalerie unter Berücksichtigung der Entwicklung des Museums zu einem öffentlichen und repräsentativen Raum im 18. und 19. Jahrhundert", 2016.

カール・フリードリッヒ・シンケル (Karl Friedrich Schinkel 1781-1841) が設計した衛兵本部の計画概要を整理したものに関しては、Michael Müller, "Die Altstädter Hauptwache am Theaterplatz : der einzige Bau Schinkels in Dresden", *Denkmalpflege in Sachsen : Mitteilungen des Landesamtes für Denkmalpflege Sachsen*, Dresden, Denkmalpflege in Sachsen, 2019, pp. 47-55 を参照。

ツヴィンガーフォーラムの計画概要を整理したものに関しては、次の文献を参照。

Max Mütterlein, "Gottfried Semper und dessen Monumentalbauten am Dresdner Theaterplatz" 1913.

Kurt Milde, *Neorenaissance in der deutschen Architektur des 19. Jahrhunderts : Grundlagen, Wesen und Gültigkeit*, Dresden, Verlag der Kunst, 1981, pp. 142-175.

Heinrich Magirius, "Gottfried Semper in Dresden", *Zeitschrift Für Kunstgeschichte*, vol. 57, no. 3, JSTOR, 1994, pp. 480-511.

Laudel, op. cit., pp. 149-158.

Heidrun Laudel, "Im Ringen um eine »monumentale« Kunst. Sempers Dresdner Jahre (1834-1849)", Lühr, Hans-Peter, ed., *Dresdner Hefte; Beiträge zur Kulturgeschichte*; 75; *Der Architekt und die Stadt: Gottfried Semper zum 200. Geburtstag*, Dresden, SLUB, 2003, pp. 3-17.

Heidrun Laudel, "Gottfried Sempers Zwingerforum in Dresden im Kontext der Schlosserweiterungspläne des 18. Jahrhunderts", *Die Wiener Hofburg und der Residenzbau in Mitteleuropa im 19. Jahrhundert: monarchische Repräsentation zwischen Ideal und Wirklichkeit*, Wien, Böhlau, 2010, pp. 309-333.

ゼムパーの都市計画に関するものに関しては、次の文献を参照。

Heinrich Habel, "Sempers städtebauliche Planungen im Zusammenhang mit dem Richard-Wagner-Festspielhaus in München" *Gottfried Semper und die Mitte des 19. Jahrhunderts*; 1976.

Andreas Hauser, "Sempers Städtebauliche Visionen 'Im Mittelpunkt Der Stadt [...]' Ein von Öffentlichen Gebäuden Umgebenes, Wahrhaft Grossartiges Forum [...].", *Zeitschrift Für Kunstgeschichte*, vol. 67, no. 3, JSTOR, 2004, pp. 381-400.

Andreas Hauser, "Semper und der Städtebau. Der Traum von neuzeitlichen Foren", Winfried Nerdinger, Werner Oechslin, ed., *Gottfried Semper, 1803-1879: Architektur und Wissenschaft*, München, Prestel Verlag GmbH + Co, 2003, pp. 440-451.

Inge Podbrecky, "Koordination und Subordination. Gottfried Sempers Wiener Kaiserforum als symbolischer Raum. Zum 200. Geburtstag von Gottfried Semper", *Verein für Geschichte der Stadt Wien, ed., Wiener Geschichtsblätter*; 58, 2003, pp. 316-332.

以上の文献から、ゼムパーはドレスデンだけでなく、ハンブルク、チューリッヒ、ウィーンなどの都市計画を立案していたことがわかる。本研究の対象である劇場広場は、ゼムパーの最初の都市計画案であり、他の都市計画の研究とも十分に関連するものと思われる。

ゼムパー後の劇場広場の再設計に関するものに関しては、次の文献を参照。

Albert Hofmann, "Die Umgestaltung des Theaterplatzes in Dresden" *Deutsche Bauzeitung <Berlin>* 37, 1903, pp. 638-641.

Hans Erlwein, "Der Theaterplatz zu Dresden und dessen Umgestaltung", *Neudeutsche Bauzeitung*; 6, 1910, pp. 481-486.

Hans Erlwein, "Das italienische Dorfchen in Dresden (12. Sonderheft der Architektur des XX. Jahrhunderts)", Berlin, Verlegt bei Ernst Wasmuth A.-G., 1913.

Volker Helas, *Hans Erlwein, Stadtbaurat in Dresden 1905 - 1914*, Sandstein Michel, 1998.

Heidrun Laudel, "Im Dienste eines herausragenden Bauwerks des 19. Jahrhunderts: der Wiederaufbau der Semperoper in Dresden", *Wolfgang Hänsch - Architekt der Dresdner Moderne*; 2009, pp. 120-137.

⁴ Laudel, 2010, op. cit., pp. 311-312 によれば、この時点でザクセン王国 (Königreich Sachsen) は、旧国家体制から立憲君主制への移行期にあり、1827 年に初代ザクセン王が亡くなって以来、彼の記念碑を建てる議論が続いていたという。

Sonja Hildebrand, *Gottfried Semper: Architekt und Revolutionär*, Stuttgart, Dmstadt, wbg THEISS, 2020, p. 59 によれば、アウグスト一世の記念像配置計画は、1830 年の革命後、「秩序の力を示し、君主制を祝う」ことを目的とするプロジェクトの一つとして推進された。

⁵ Laudel, 2003, op. cit., p. 150 によれば、宮廷教会の東にあるアウグストゥス橋 (Augustusbrücke) は、当時エルベ川に架かる唯一の橋だった。橋を渡ると、ドレスデンの宮殿や貴重なモニュメントに隣接して、点在する小屋からなるバラック地域が見えたという。

⁶ Gottfried Semper, *das KÖNIGLICHE HOF THEATER zu DRESDEN*, Braunschweig, Heidelberg historic literature - digitized, 1849, p. 1 によれば、この複合施設は、古代人の広場 (Forum) にある程度対応し、広間に囲まれ、神殿や国家の建物がそびえ、記念碑、噴水、彫像で飾られたものであった。

⁷ 第一劇場、絵画館、第二劇場それぞれの設計と建設時期については、Laudel, 2003, op. cit., p. 168/186/466 を参照。

⁸ 本論文では、第一劇場消失後に再建された建物を第二劇場と呼ぶこととする。

⁹ (表 1) で使用した図版の出典は Sächsische

Landesbibliothek – Staats- und Universitätsbibliothek Dresden, SLUB による。各計画の概要については第三章において詳述する。

¹⁰ ツヴィンガー宮殿は、宮廷建築家マッティウス・ダニエル・ペッペルマン (Matthäus Daniel Pöppelmann 1662–1736) が 1709 年から 1732 年にかけて設計したものである。宮廷教会 (Katholische Hofkirche) は、宮廷建築家ガエターノ・キアヴェリ (Gaetano Chiaveri 1689–1770) が 1736 年から 1749 年にかけて設計したものである。衛兵本部

(Altstädtische Hauptwache) は、1830 年から 1832 年にかけて、シンケルによって設計されたものであり、シンケルヴァッヘ (Schinkelwache) として知られていた。

¹¹ オランジェリーは南方の樹木が越冬するための温室である。Mütterlein, op. cit., pp. 13–24 によれば、旧劇場を建て替えるか、新たな劇場を建てるかについて、長年にわたって多くの議論がなされてきた。

¹² (図 3) はゼムパーの計画に従って描かれた図面である。ゼムパーが描いた図面は転載許可が得られないため、Kurt Milde, *Neorenaissance in der deutschen Architektur des 19. Jahrhunderts : Grundlagen, Wesen und Gültigkeit*, Dresden, Verlag der Kunst, 1981, p. 146 を参照。

¹³ Laudel, 2003, op. cit., p. 173 によれば、1837 年 9 月 22 日、ゼムパーはプロジェクトの詳細を完成させるよう依頼され、6 カ月後に 14 枚の図面と費用の見積もりを提出した。

¹⁴ (図 4) はゼムパーの計画に従って描かれた図面である。ゼムパーが描いた図面は転載許可が得られないため、Winfried Nerdinger, Werner Oechslin, *Gottfried Semper, 1803–1879 : Architektur und Wissenschaft*, München, Prestel Verlag GmbH + Co, 2003, P. 189 を参照。Volker Plagemann, "Das deutsche Kunstmuseum, 1790–1870: Lage, Baukörper, Raumorganisation, Bildprogramm", *Studien zur Kunst des 19. Jahrhunderts*; Vol. 3, Prestel-Verlag, 1967, p. 131 によれば、1838 年フリードリヒ・アウグスト二世 (Friedrich August II. 1750–1827) によって任命された絵画館委員会は、ゼムパーに絵画館の設計を依頼した。Laudel, 2003, op. cit., p. 187 によれば、1838 年ゼムパーが最初に提出した絵画館の敷地は、ツヴィンガー宮殿の北東側 (エルベ川の対岸) にある Stallwiesen と呼ばれる場所であった。エルベ川とアウグストゥス橋の軍事的重要性から、戦時中は非常に危険な場所になる可能性があったこと、土手に高価な下部構造を設ける必要があったこと、などの理由から実行に移されることはなかった。なお、この場所は本研究の対象敷地外であるため、本文中での言及はしていない。

¹⁵ Ibid., p. 154 によれば、1839 年以降、ツヴィンガー宮殿周辺が、対岸よりも中心部に位置し、基礎の条件も良いという二つの利点をもつことが明らかとなり、絵画館の建築用地として注目されるようになったという。ゼムパーは、このような状況を踏まえ、ツヴィンガー宮殿の拡張計画にできるだけ影響を与

えないような解決策を模索した。1835 年の計画では、ツヴィンガー宮殿の北側に、パビリオンを配置した馬蹄形の絵画館の輪郭をスケッチしている。

¹⁶ Mütterlein, op. cit., pp. 6 によれば、砂糖工場は、ドレスデンで最初の工業会社の一つであった。1820 年に建てられ、1843 年にホテル (Hotel Bellevue) に改築された。

¹⁷ Gottfried Semper, *Begleitschreiben Sempers vom 3. Mai 1839*. Dresden, SähSTA: Min. f. Volksbildg., Nr. 18.909/1, Bl. 5, 1839.

¹⁸ ウォールパビリオン (Wallpavillon) は、ツヴィンガー宮殿の北側にあるアーチ型のプロムナードの上部にある建物である。

¹⁹ Laudel, 2003, op. cit., p. 188.

²⁰ ツヴィンガー宮殿の南西にある回廊の中央にはクロネントールと呼ばれる中門がある。

²¹ Ibid., p. 154.

²² Milde, op. cit., p. 151.

²³ Semper an die Denkmalkommission am 18. Juni 1840. Dresden, SähSTA, Geh. Rat, Loc. 4448/5, Bl. 108–112 に、ゼムパーは、「ツヴィンガー宮殿が絵画館によって閉鎖されると、ツヴィンガー宮殿の中庭は博物館の壮麗な中庭となり、中庭に設置されたすべての記念像が博物館の芸術的宝物に含まれることになる」と記した。

²⁴ Henrik Karge, *Gottfried Semper-Dresden und Europa: die moderne Renaissance der Künste: Akten des Internationalen Kolloquiums der Technischen Universität Dresden aus Anlass des 200. Geburtstags von Gottfried Semper*, Deutscher Kunstverlag, 2007, p. 143.

²⁵ Milde, op. cit., p. 145 によれば、1844 年建築雑誌 (Allgemeine Bauzeitung) に掲載されたゼムパーの設計図は、1842 年に委員会に提出されたものである。この計画は、1849 年に彼が出版した著書 Semper, 1849, op. cit., p. 2 にも示されていた。Camillo Sitte, *Der Städtebau nach seinen künstlerischen Grundsätzen*, Birkhäuser, 1909, p. 129 に、カミロ・ジッテ (Camillo Sitte 1843–1903) は、この案を「この分野で最近考え出された最も興味深いもの」と賞賛している。

²⁶ Mütterlein, op. cit., p. 10 によれば、絵画と装飾品を置くスペースがないこと、古い収蔵庫が劇場から遠すぎるなどから、ゼムパーは劇場とツヴィンガー宮殿をつなぐ新たな建物を計画し、そこを収蔵庫として使うことを計画したという。

²⁷ Mütterlein, op. cit., p. 80.

²⁸ Ibid., p. 79.

²⁹ Ibid., p. 86 によれば、ツヴィンガー宮殿をエルベ川に開放する案よりも、絵画館で閉鎖する案の方が、美術品の保存には適していると判断された。

³⁰ Ibid., p. 81.

³¹ Erlwein, op. cit., p. 4 によれば、広場の北東側にある職人小屋はイタリア村落の一部であったが、取り壊されることなく、19 世紀にアパートに改築された。

³² Mütterlein, op. cit., p. 46.

³³ Heinrich Magirius, *Gottfried Sempers zweites Dresdner Hoftheater : Entstehung, künstlerische Ausstattung*, Ikonographie, Wien und Köln, Böhlau Verlag, 1985, p. 11

によれば、隣接するツヴィンガー宮殿との火災時の危険性を減らすために、第二劇場を後退させ、絵画館の北西面の延長上に正面ファサードを配置するという設計要件がある。

³⁴ (図 14) は地図に従って描かれた図面である。図面は転載許可が得られないため、以下の文献を参照した。Hans Erlwein, "Das italienische Dorfchen in Dresden (12. Sonderheft der Architektur des XX. Jahrhunderts)", Berlin, Verlegt bei Ernst Wasmuth A.-G., 1913, p. 6.

³⁵ (図 15) はハンス・エルヴァインの計画に従って描かれた図面である。ハンス・エルヴァインが描いた図面は転載許可が得られないため、以下の文献を参照した。Erlwein, op. cit., p. 7.

³⁶ Ibid., pp. 7-9.

³⁷ Staatliche Kunstsammlungen Dresden, Institut für Denkmalpflege, Arbeitsstelle Dresden, Gottfried Semper, 1803-1879: Baumeister zwischen Revolution und Historismus, München, Callwey Verlag, 1980, p. 151 によると、ゼムパーは記念碑委員会への報告の中で、この計画における設計上の欠陥を次のように指摘したという。「オランジェリーと劇場の短縮により、劇場と教会の 2 つの支配的な構造はもはや相互に関連しないものとなった。このことは、新たなものと既存のものの間の調和を損なった。」

³⁸ Martin Fröhlich, *Gottfried Semper: zeichnerischer Nachlass an der ETH Zürich: kritischer Katalog*, Basel und Stuttgart, Birkhäuser Verlag, 1974, p. 40.

³⁹ Semper, 1849, op. cit., p. 3 によれば、オランジェリーはゼムパーの計画に必要なものであり、それが別の場所に建てられたという事実は、彼の計画にとって致命的なものであったという。

⁴⁰ Fröhlich, op. cit., p. 40 によると、絵画館ができた時、第一劇場は「間違った」場所にあった。そのため、第二劇場は旧来の場所ではなく、さらに北に建設され、宮廷教会、絵画館、劇場の間に新しい空間が作られたという。

⁴¹ 1889 年に、広場の中央にザクセン第 4 代国王ヨハンの記念碑が設置された。

⁴² 20 世紀になって再び注目を集めるようになった劇場広場は、何世紀にもわたって数多くの建築家や芸術家が入念に設計した結果であると思われる。なお、このドレスデン劇場広場は、1945 年第二次世界大戦中のドレスデン爆撃により破壊された。現在の姿は、再建されたものである。

⁴³ Laudel, 2010, op. cit., p. 331 によれば、ゼムパーのツヴィンガーフォーラムの計画は、ペッペルマンの計画案とは、明らかに異なるものの、歴史的な連続性を持っているという。

⁴⁴ Ibid., p. 314 では、ゼムパーがツヴィンガー宮殿をザクセン建築の隆盛期の証と認識するばかりでなく、

この建築群に将来の都市開発の可能性を見出したであろうことが指摘されている。

参考文献

Gottfried Semper, *das KÖNIGLICHE HOF THEATER zu DRESDEN*, Braunschweig, Heidelberg historic literature -digitized, 1849.

Camillo Sitte, *Der Städtebau nach seinen künstlerischen Grundsätzen*, Birkhauser, 1909.

Hans Erlwein, "Das italienische Dorfchen in Dresden (12. Sonderheft der Architektur des XX. Jahrhunderts)", Berlin, Verlegt bei Ernst Wasmuth A.-G., 1913.

Volker Plagemann, "Das Deutsche Kunstmuseum 1790 - 1870: Lage, Baukörper, Raumorganisation, Bildprogramm", *Studien zur Kunst des 19. Jahrhunderts*; 3, München, Prestel, 1967.

Max Mütterlein, "Gottfried Semper und dessen Monumentalbauten am Dresdner Theaterplatz" 1913.

Martin Fröhlich, *Gottfried Semper : zeichnerischer Nachlass an der ETH Zürich : kritischer Katalog*, Basel und Stuttgart, Birkhäuser Verlag, 1974.

Staatliche Kunstsammlungen Dresden, Institut für Denkmalpflege, Arbeitsstelle Dresden, ed., *Gottfried Semper, 1803-1879 : Baumeister zwischen Revolution und Historismus*, München, Callwey Verlag, 1980.

Kurt Milde, *Neorenaissance in der deutschen Architektur des 19. Jahrhunderts : Grundlagen, Wesen und Gültigkeit*, Dresden, Verlag der Kunst, 1981.

Fritz Löffler, *Das alte Dresden : Geschichte seiner Bauten*, Hamburg, Verlag Weidlich, 1984.

Heinrich Magirius, *Gottfried Sempers zweites Dresdner Hoftheater : Entstehung, künstlerische Ausstattung*, Ikonographie, Wien und Köln, Böhlau Verlag, 1985.

Hermann Heckmann, *Matthäus Daniel Pöppelmann und die Barockbaukunst in Dresden*, stuttgart, Deutsche Verlags-Anstalt, 1986.

Martin Fröhlich, *Gottfried Semper*, Zürich und München, Artemis Winkler Verlag, 1991.

Heinrich Magirius, Harald Marx, *Gemäldegalerie Dresden. Die Sammlung Alte Meister. Der Bau Gottfried Sempers*, leipzig, Seemann E.A, 1992.

Magirius, Heinrich. "Gottfried Semper in Dresden." *Zeitschrift Für Kunstgeschichte*, vol. 57, no. 3, JSTOR, 1994.

河田智成、「ゴットフリート・ゼンパーからアドルフ・ロースへ：近代初期における建築的統辞法の展開」九州大学博士論文（甲第 4778 号）、1999 年。

Heidrun Laudel, "Im Ringen um eine »monumentale« Kunst. Sempers Dresdner Jahre (1834-1849)", Lühr, Hans-Peter, ed., *Dresdner Hefte; Beiträge zur Kulturgeschichte*; 75; *Der Architekt und die Stadt: Gottfried Semper zum 200. Geburtstag*, Dresden, SLUB, 2003.

Inge Podbrecky, "Koordination und Subordination. Gottfried Sempers Wiener Kaiserforum als symbolischer Raum. Zum 200. Geburtstag von Gottfried Semper", Verein für Geschichte der Stadt Wien, ed., *Wiener Geschichtsblätter*, 58, 2003.

Winfried Nerdinger, Werner Oechslin, *Gottfried Semper*,

1803-1879 : *Architektur und Wissenschaft*,
München, Prestel Verlag GmbH + Co, 2003.

Hauser, Andreas. "Sempers Städtebauliche Visionen 'Im
Mittelpunkte Der Stadt [...] Ein von Öffentlichen
Gebäuden Umgebenes, Wahrhaft Grossartiges Forum
[...]'" *Zeitschrift Für Kunstgeschichte*, vol. 67, no. 3,
JSTOR, 2004.

Henrik Karge, *Gottfried Semper-Dresden und Europa: die
moderne Renaissance der Kunst: Akten des
Internationalen Kolloquiums der Technischen
Universität Dresden aus Anlass des 200. Geburtstags von
Gottfried Semper*, Deutscher Kunstverlag, 2007.

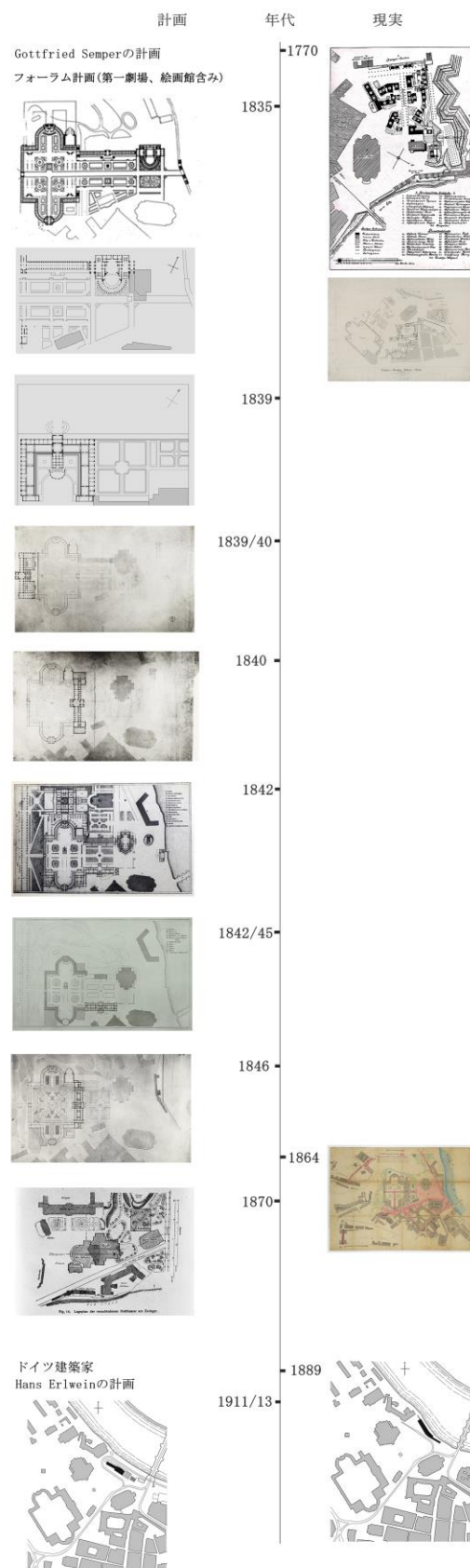
Heidrun Laudel, "Gottfried Sempers Zwingerforum in
Dresden im Kontext der Schlosserweiterungspläne des 18.
Jahrhunderts", *Die Wiener Hofburg und der Residenzbau i
n Mitteleuropa im 19. Jahrhundert: monarchische
Repräsentation zwischen Ideal und Wirklichkeit*, Wien,
Böhlau, 2010.

Larissa Ferro M.A, "Gemäldegalerie Dresden Eine
Betrachtung des Außenprogramms der Dresdner
Gemäldegalerie unter Berücksichtigung der Entwicklung
des Museums zu einem öffentlichen und repräsentativen
Raum im 18. und 19. Jahrhundert", 2016.

Michael Müller, "Die Altstadt Hauptwache am
Theaterplatz : der einzige Bau Schinkels in Dresden",
*Denkmalpflege in Sachsen : Mitteilungen des
Landesamtes für Denkmalpflege Sachsen*, Dresden,
Denkmalpflege in Sachsen, 2019.

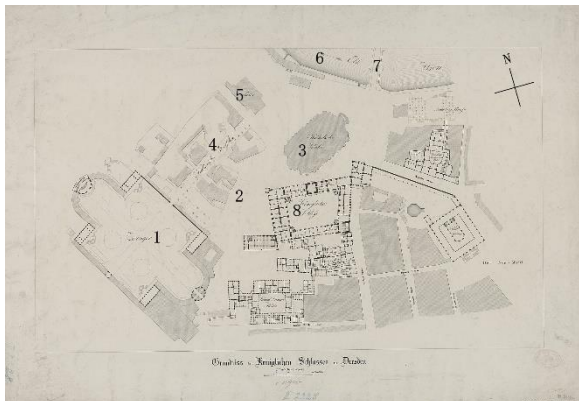
Sonja Hildebrand, *Gottfried Semper: Architekt und
Revolutionär*, Stuttgart, wbv THEISS, 2020.

図版一覧

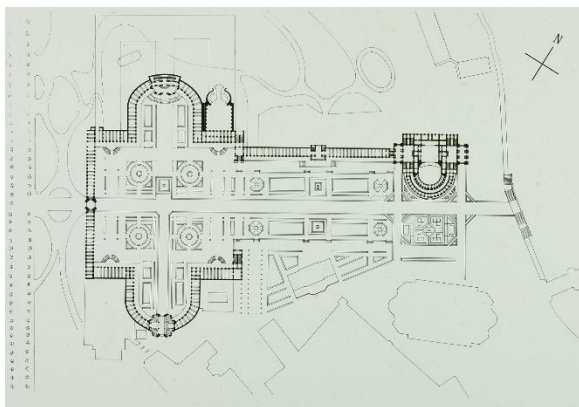


(表1) ドレスデン宮廷劇場広場の計画の変遷

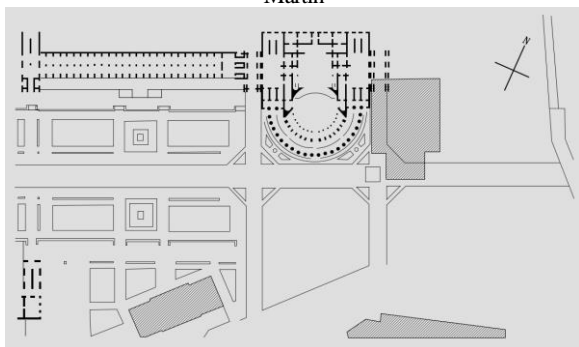
出典：執筆者作成



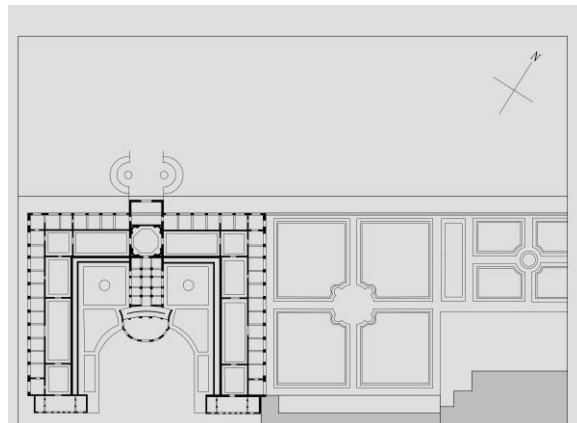
(図1) 1770年の地図 (1. ツヴィンガー宮殿 2. 衛兵本部 3. 宮廷教会 4. イタリアの村落 5. 旧劇場 6. エルベ川 7. アウグストゥス橋 8. 王宮)
出典： SLUB Dresden / Deutsche Fotothek



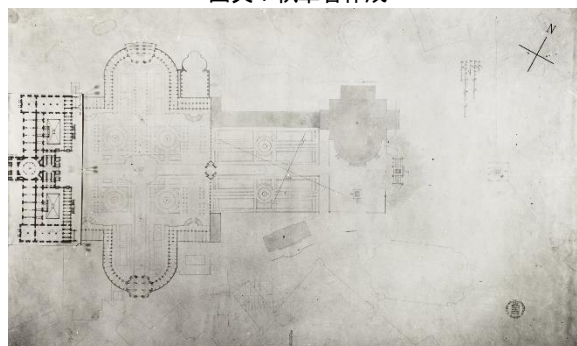
(図2) ゼムパーのツヴィンガーフォーラム計画案
1835年
出典： SLUB Dresden / Deutsche Fotothek / Foto: Würker, Martin



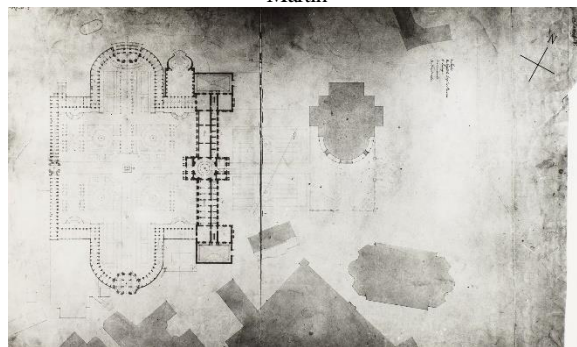
(図3) ゼムパーのツヴィンガーフォーラム計画案
1835年
出典： 執筆者作成



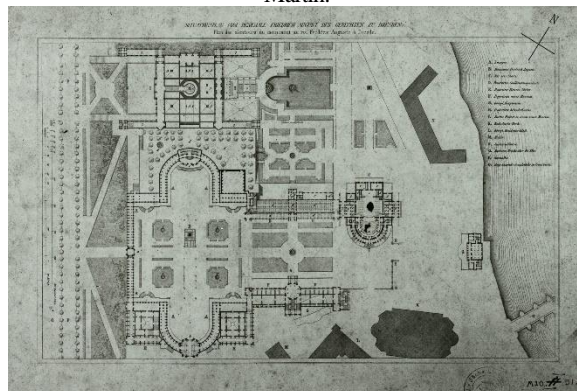
(図4) ゼムパーのツヴィンガーフォーラム計画案
1839年
出典： 執筆者作成



(図5) ゼムパーのツヴィンガーフォーラム計画案
1839/40年
出典： SLUB Dresden / Deutsche Fotothek / Foto: Würker, Martin

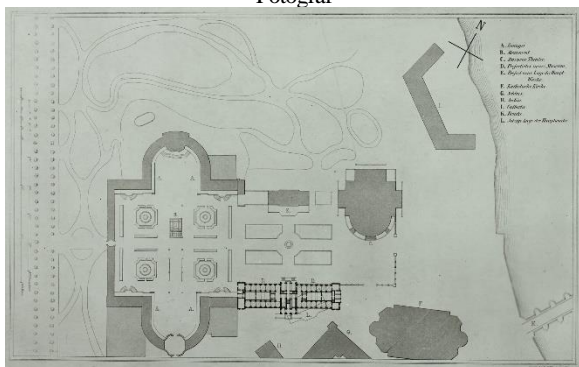


(図6) ゼムパーのツヴィンガーフォーラム計画案
1840年
出典： SLUB Dresden / Deutsche Fotothek / Foto: Würker, Martin.



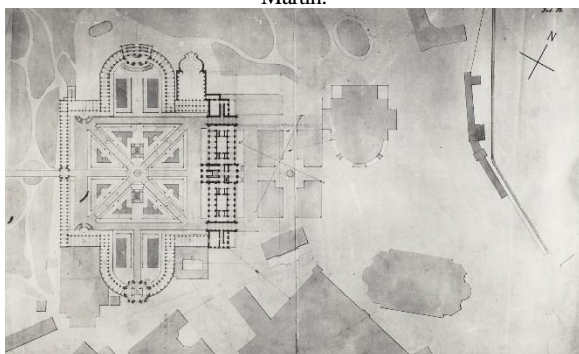
(図7) ゼムパーのツヴィンガーフォーラム計画案
1842年

出典：SLUB Dresden / Deutsche Fotothek / Foto:Unbekannter Fotograf



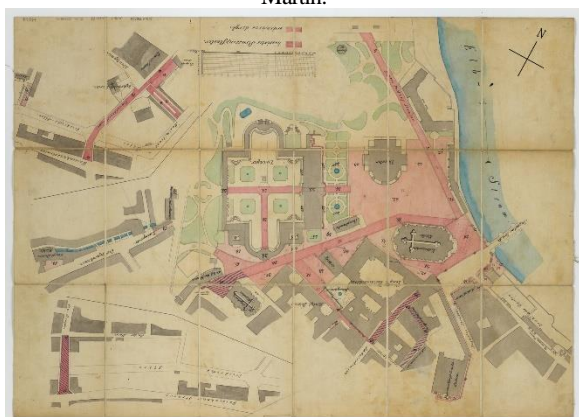
(図8) ゼムパーのツヴィンガーフォーラム計画案
1842/45年

出典：SLUB Dresden / Deutsche Fotothek / Foto: Würker, Martin.



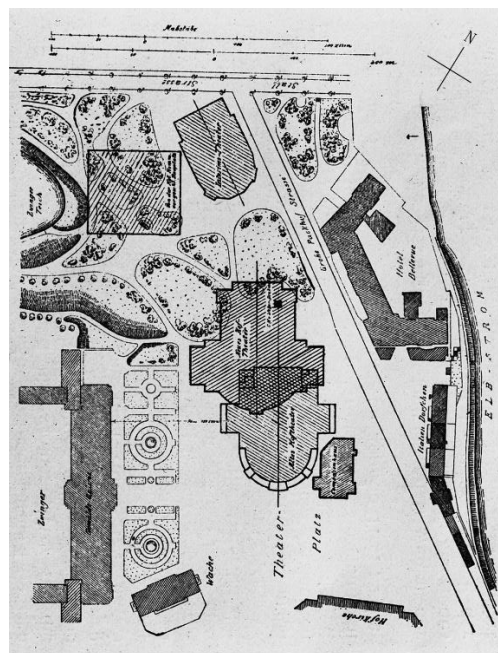
(図9) ゼムパーのツヴィンガーフォーラム計画案
1846年

出典：SLUB Dresden / Deutsche Fotothek / Foto: Würker, Martin.



(図10) 1864年の地図

出典：SLUB Dresden / Deutsche Fotothek / Foto: Würker, Martin.



(図11) 第二劇場計画案 1870年

出典：SLUB Dresden / Deutsche Fotothek / Foto: Heinrich, Gertrud



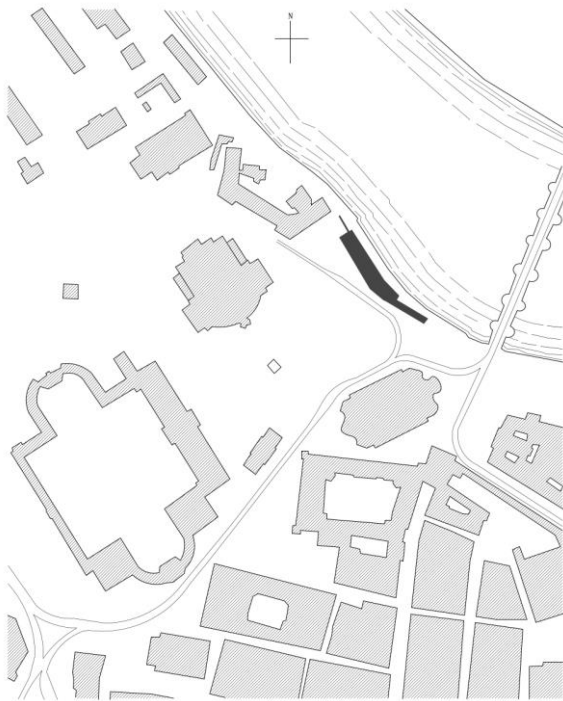
(図12) 第一ドレスデン宮廷劇場

出典：SLUB Dresden / Deutsche Fotothek / Foto: Unbekannter Fotograf

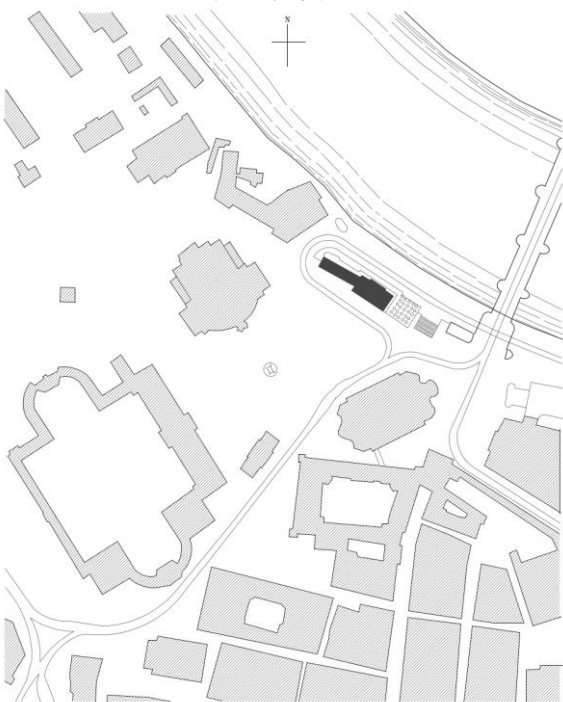


(図13) 第二ドレスデン宮廷劇場

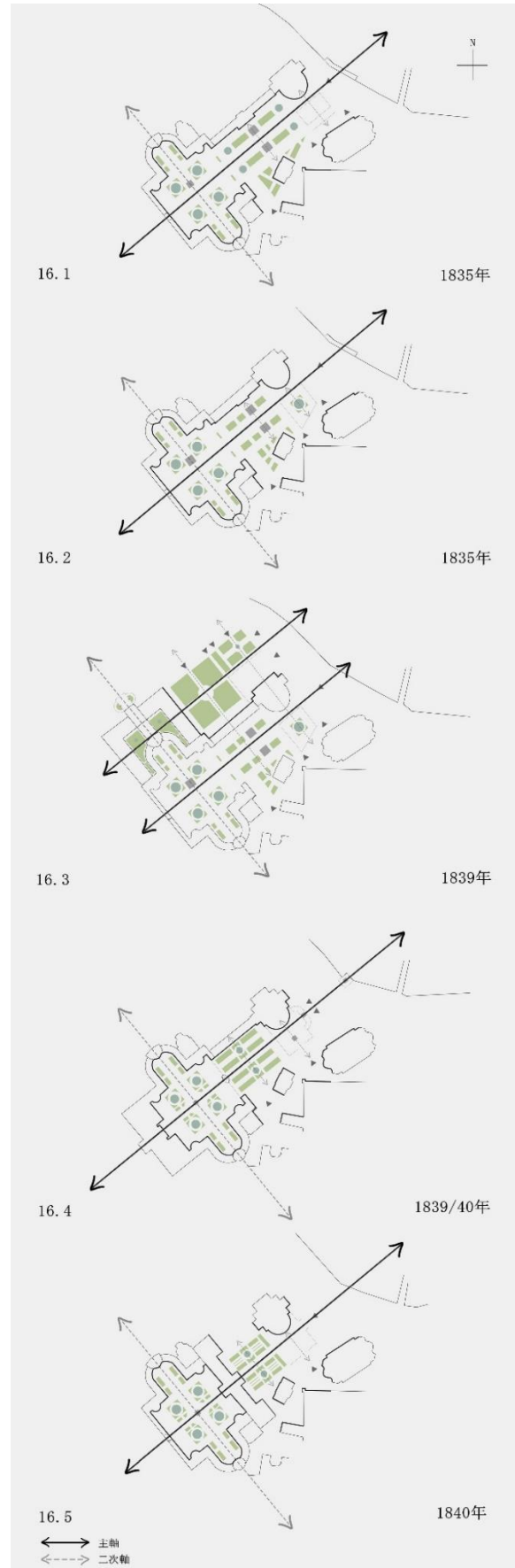
出典：SLUB Dresden / Deutsche Fotothek / Foto: Ahlers, Henrik



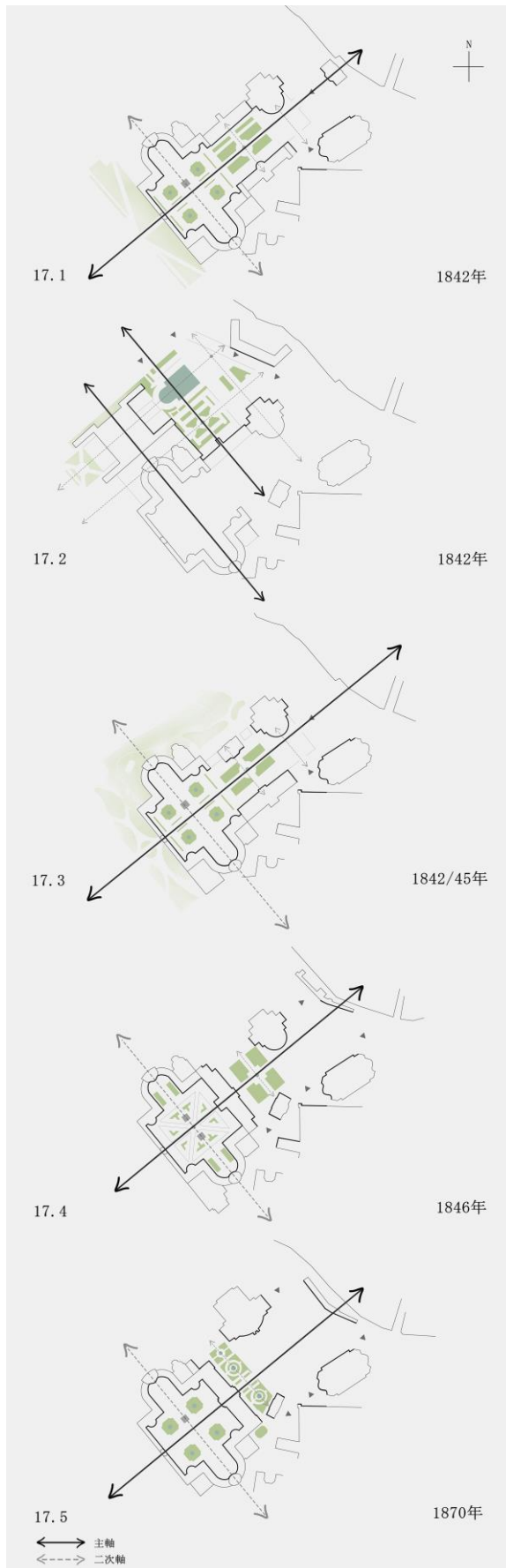
(図 14) 1889 年の地図
出典：執筆者作成



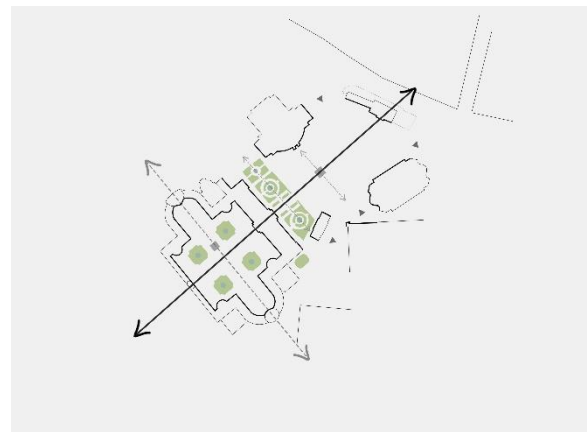
(図 15) ハンス・エルヴァインの計画案 1911/13 年
出典：執筆者作成



(図 16) ゼムパーの計画案分析図
出典：執筆者作成



(図 17) ゼムパーの計画案分析図
出典：執筆者作成



(図 18) ハンス・エルヴァインの計画案分析図
出典：執筆者作成

The formation process of the Dresden Theater square

-The role of Gottfried Semper-

SHU BOYA

ABSTRACT

The Dresden Theater Square (known as Dresden Theaterplatz in German), is surrounded by three landmarks—the Zwinger complex, the Elbe River, and the Semper Opera House, and is the main object discussed in this study. During the 18th to 20th centuries, architects attempted various design schemes for the Dresden Theater Square, and its surrounding area. The previous paper provided a review of the series of plans for the Zwinger Palace, from Marcus Conrad Dietze (1658–1704) to François de Cuvilliers der Ältere (1695–1768), and discussed how other architects interpreted this place and its positioning in the city, before the theater square was designed by Gottfried Semper (1803–1879). Accordingly, this paper presents a study on the Zwinger forum and theater plans by Semper. It also discusses the formation of the place, its alteration into the theater square by Semper, and Semper’s role in creating the square that served as an important space in the city.

Most of existing studies focus on Semper Opera other than the square, and are often carried out from historical and social perspectives other than the design perspective. Semper’s first urban planning proposal was for the Dresden Theater Square. It is closely related to and indispensable for analyzing the rest of his urban planning schemes. This study also aims to provide a database which is related to theater square and rarely seen in previous studies. Meanwhile, this study gives an exposition of the universality and uniqueness of Semper’s design schemes. This study method includes collection and chronological arrangement of drawings and argument materials relating to the plans, and explanation of the architect’s intentions.

This paper consists of four parts. Chapter One introduces the content, means, and innovative points of the study. Chapter Two gives a detailed account of Semper’s Zwinger forum and theater plans, from 1835 to 1870, as well as the subsequent schemes in the 20th century, after identifying the historical background. Chapter Three attempts to analyze the work based on the plan or pictures of each scheme for the theater square, and interprets Semper’s design from its axis and geometrical elements. Chapter Four summarizes Semper’s role in the creation of the space of the theater square, based on the achievements of the previous paper and the case analysis in Chapter Three.